日本ＥＩＭＹ研究所報
ＥＩＭＹＪ－１３０９
平成２５年９月

被災地の言葉（３）

「災難に逢う時節には逢うがよく候」

「災難に逢う時節には逢うがよく候　死ぬ時節には死ぬがよく候　是れはこれ　災難をのがるる妙法にて候」。これは文政１１年（1828）に新潟県で発生した三条地震の直後，良寛が与板（現長岡市）にいた友人に送った手紙の一節である。三条地震はマグニチュード 6.9 の直下型地震で震度は７，死者は 1600 人に及んだと伝えられている。

この良寛の言葉は中越地震のときも話題になったが，良寛の，死を超越した高い境地を示すものだとか，傍観的で不謹慎だとか言われたものである。しかし，この度の震災では，私自身がそうであったように，この言葉に救われた人も多かったのではないだろうか。

被災地の人々には，それぞれにそこにいなければならない理由があった。その地で多くの肉親や知人が亡くなった。未だ行方がわからない。ほうほうのていで避難してきて身を寄せている。病身で身体を動かせない。身体の不自由な家族といる。飼っている動物がいる。先祖代々受け継がれてきた田畑や墓がある。家がある。暮らしの基盤がある。仲間がここにいる。自分を必要としている人がいる。逃げたくとも手だてが無い。行くあてもない。・・・・・。その土地の風土と不可分に暮らしてきた東北の人々にとってはなおさらであった。残る人も去る人もそれぞれの葛藤と不安を抱えていた。

３月１１日の本震の後も次々と大小の余震が襲い，４月７日の余震の揺れは本震よりも大きかった地域もあった。そして福島第一原子力発電所の事故とそれに伴う放射能汚染の深刻さも次々と明るみに出つつあった。そうした中，数々の不安を抱え，それぞれの地域にいなければならない理由のあった人々にとって，また，それにもかかわらず，あてどもなくさまよわなければならなかった人々にとって，この良寛の言葉は大きな安らぎを与えてくれたのである。

三条地震のとき，良寛が住んでいた島崎（現長岡市）では死者こそ出なかったものの大きな被害を受けた。良寛は多数の死者を弔うために近隣の村々を訪ね歩き，その惨状に涙を流した。手紙のこの言葉の前には，**「うちつけに　死なば死なずて　ながらえて　かかる憂き目を　みるがわびしさ」**（突然に死んでしまったらよかったのに，なまじ死なないで生きながらえて，このような辛いありさまを見るのは何と悲しいことか）という歌を記している。これらの良寛の言葉は悟りでも崇高な教理でもなく，良寛の生身の実感であった。

生の数だけ死があることを現代社会は忘れつつある。しかしこの度の震災では，人々は死というものを身近に感じ，そして亡くなった人の命，そして自らの命というものを必死に考えた。良寛の言葉はこのような人々に安らぎを与えるものであるとともに，亡くなった人々への鎮魂の言葉でもあった。